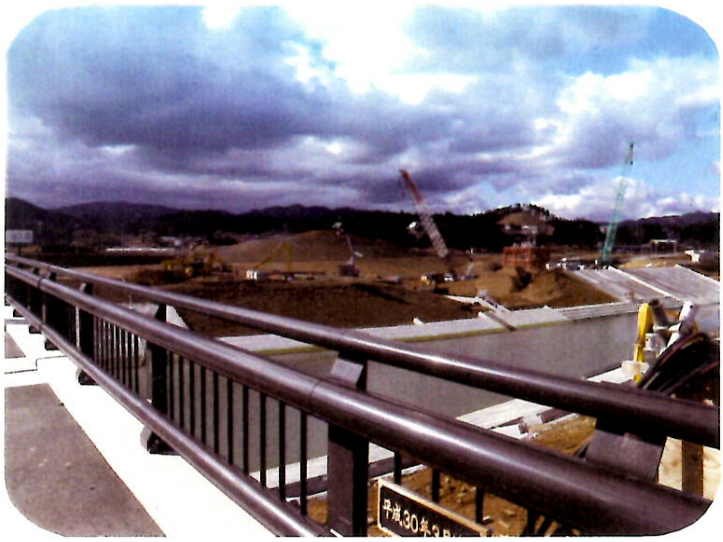
2018年度 被災地ボランティアツアー in南三陸・石巻

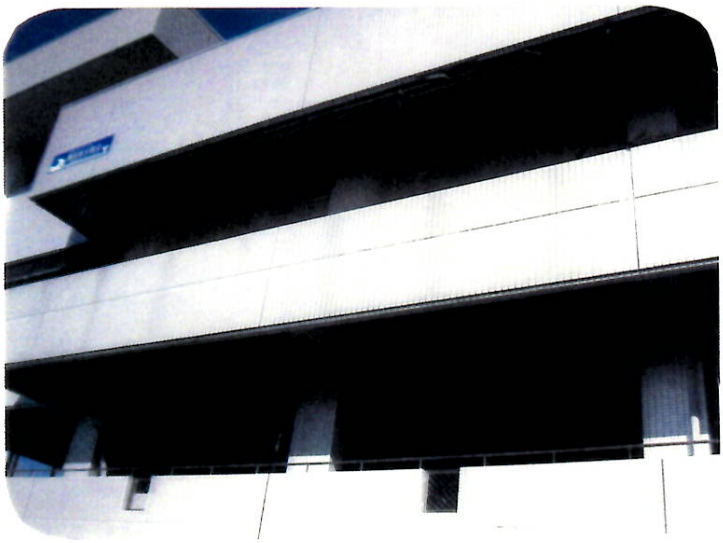
3月13日～16日

南三陸町志津川視察



防災対策庁舎

最後まで町民に避難を呼びかけていた場所。三階建ての建物を津波が襲い、骨組みだけになってしまっている。今後、国で20年間保管することが決まっている。



高野会館

ここでは従業員の英断によって327人の命が救われた。建物内はあの日のままになっている。現在、民間震災遺構として保管されている。

戸倉中学校

当時、高台にあった校舎の1階の天井まで津波によって水没した。つい去年まで校庭に仮設住宅があった。現在、校舎は戸倉公民館として再建されている。

震災講話

震災後の避難所の様子や生き延びる方法について詳しくお話をして頂いた。もし都心で直下型地震が発生したら、食糧不足や人間関のトラブルが危惧されるだろう。

大川小学校視察

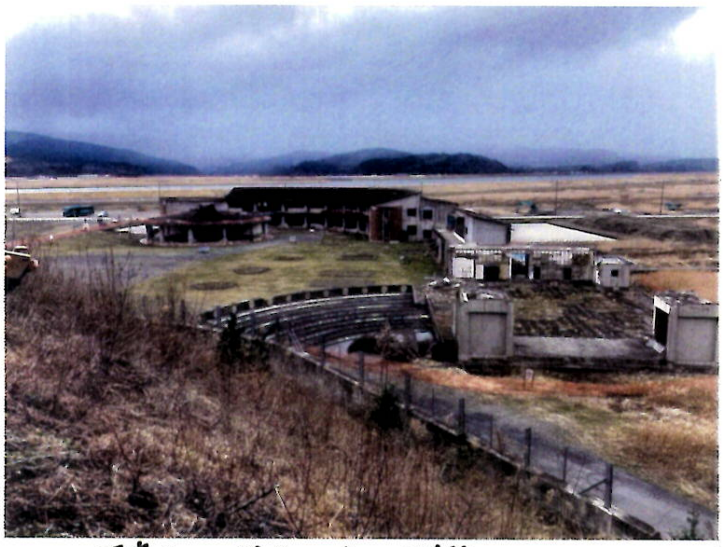


写真1　現在の大川小学校

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）に伴う津波が本震発生後およそ50分経った15:36頃、北上川を遡上した。その結果、河口から約5kmの位置にあった大川小学校は7～8mの高さの津波に襲われ、校庭にいた児童78名中74名と教職員10名、スクールバスの運転手1名が犠牲となった。

この事故は、学校管理下にある子どもが犠牲になった事故としては戦後最悪の惨事となった。

（wikipediaより一部引用

今回のボランティアツアーでは、当時大川小学校の6年生だった娘さんを津波で亡くされた、佐藤敏郎さんに大川小学校で実際にあったこと、津波被害にあう前はどんな所だったのかなど詳しくお話していただきながら、大川小学校の視察を行なった。

2016年3月、石巻市は被災した大川小学校全体を震災遺構として保存することを決定した。遺族の中には、校舎取り壊しを求める声などもあったため、校舎周辺も公園化し、植栽で校舎を取り囲む予定となっている。

写真2　今回お話いただいた佐藤敏郎さん（写真左）

写真3　津波によって止まった時計

現地に行き、生で見る景色は、テレビの画面を通して見るものと全く別物であった。視察当日は雪が降り、風も強くとても寒かった。震災当時もこのような天気であり、さらに津波により全身ズブ濡れ状態であったということを聞き、今の自分たちでとても想像できない状態で、助けを待っていたのかと思うと心が痛んだ。

また、実際に現地に行ってみて思ったことは、本当にここまで津波が来て、しかもその津波が8mもあったのかということである。大川小学校からは海は見えず、その当時もし自分がそこにいたら「津波はここまでは来ない」と思い込んでいたかもしれない。もし地震が起きて、津波が発生した場合、海が見えなくても川を遡上して津波は内陸にもやってくるということを改めて認識することができた。

～防災町歩き～

写真1　防災町歩きの様子

IPadを使用し，実際に現場に行くことで震災前と震災後を比較することができ，改めて津波の恐ろしさを感じさせられた．
また，防潮堤の建設や津波避難階段，津波避難ビルの建設など，震災後の復興の取り組みについて見ることができた．

写真2 高須賀　さんを救った松の木

津波に襲われた高須賀昌昭さんを救った1本の松の木．
運転していた軽自動車は一気に2階の高さまで浮いたが，運よく電動窓が開き，脱出して2本目の枝につかまった．
その後激流をやりすごし，隣の屋根に登ったが，その家が引き波で動き流された．
そんな中，隣から呼ぶ声がし，胸までの水がある状態だったが，隣の建物に避難させてもらった．
ずぶぬれの服は脱ぎ，借りたカーテンを巻いて体を冷やさないようにしたそう．

＜震災後の取り組み＞

写真3　津波避難階段

津波避難階段の設置
津波が来た際，そのビルの住民以外の人でも屋上に避難できるよう，津波避難階段が設置された．

津波避難ビルマーク

津波避難ビルの建設
津波避難ビルとは，津波が来た際，地域住民が一時的に避難できる場所として市町村によって指定されたビルである．

写真4　津波避難ビル

災害ボランティア講話

公益社団法人 みらいサポート石巻のふじまさんにお話しして頂いた。

↑
団体の枠を超えて
2日間でまちをキレイに！

東日本大震災のとき どういったボランティアがあったのか

震災直後からたくさんのボランティアが集まり、物資配布、炊出し、泥出しなどの活動が始まった。そして各団体の活動を情報共有するために「NPO・NGO連絡会」が始まった。支援フェーズに合わせて13の「分科会」ができ、被災者のニーズや支援状況に関する情報共有や団体間の連絡調整が行われた。1年間で28万人以上の人が活動した。

震災支援の連携から 震災伝承の連携へ

2015年7月1日に宮城県の公益認定を受け「公益社団法人みらいサポート石巻」に。市民主体の震災伝承活動を活動の柱とし、2020年度に設置予定の石巻市南浜津波復興祈念公園を視野に入れ、「つなぐ未来の石巻へ」をミッションとして公益性を高めて活動を継続。

おでって活動

火起こしの様子

災害時，なにもできない人にならないようにする為に，火起こしの方法を学びスキルを習得した。
起こした火を使い「リアスの秋伝」笹かまぼこを焼いて食べた。
火を維持することが思っていた以上に難しい…。

南三陸ねぎの農作業ボランティアを行った。種まきと種拾いを説明を受けながら作業を行ったが地道な作業であった為，疲れた。
しかし，普段しない農作業で楽しくボランティア活動ができた。

農作業　その1

南三陸ねぎに土を被せる作業を行った。鍬を使ったが，力の入れ方，角度などが難しく慣れるまで時間がかかった。力仕事であった為疲れてしまったが楽しく農作農ができた。

農作業　その2

振り返りのワークショップ

4日間の振り返りをふまえつつ、南三陸町に住む20～30代の3人の方と談話を行なった。

佐藤さん 20代（写真 右から2番目）

南三陸生まれ・南三陸育ち。震災当時は高校2年生で、怪我人救助の手伝いや炊き出しを行なった。
震災前から地元に戻ってくることを考えており、大学では将来やりたいことのために様々な経験をする。
地元に戻ってきてからは観光協会に務め、その後独立してスポーツジムを運営する。

藤田さん 30代（写真 左から2番目）

出身は埼玉県。大学生のうちに研究のため南三陸を訪れる。震災時は大学院生だった。
震災に関係して何かできることをしたいという思いと、自分が訪れたことのある町が被災したということから、南三陸町への移住を決意。
現在は農家として働き、地域の農業を支えている。

星野さん 20代（写真 右から3番目）

東京都出身。学生の頃、1年程南三陸に住み込んでボランティアを行う。その間に南三陸の方々との親睦が深まり、それが移住するきっかけとなる。
教育関係の仕事に従事し、この談話の中でも被災地における教育の問題について語っていた。

南三陸のこれからを担う若い世代の方々に震災や復興についてお話を伺うことができ、4日間の振り返りにもピッタリな談話だった。
学生にとっては、自分の進路を考えていく点においてもとても参考になった。
この談話や4日間の経験を、防災やこれからの将来に活かしていきたい。

4日間の感想

今回、ボランティアツアーで石巻市、南三陸町を訪れることができ良かったです。津波の悲惨さを知ることができたという事もありますが、その震災を乗り越え、次のステップへ進んでいっているという事も知ることができました。「地元に貢献したい」など、住民の方々から前向きな言葉が多くでていた事がとても印象に残りました。

地球環境科学部 環境スペシャリスト 2年

以前から津波の情報は聞いていて知っているつもりでいましたが、8mの津波と一言に言っても実際に現地を訪れ、話を聞いた今思えば、被害の大きさが想像以上にあった。また、民宿先の方から被災したからこそのわかったことをお話しいただき、人間の恐ろしさというものを学んだ。東日本震災からわかったことを活かし、主都直型地震が来た際には、1人1人が減災を心掛け、3日分の食料と7日分の水は備蓄しておく必要を感じた。南三陸の海の幸が非常においしく、また訪れたいと思った。

4日間を通して自分にとってとても大切なことを得ることができました。大川小学校をはじめ様々な所へ行き、話を聞くことができて来て良かったと思えた。津波の威力は大きくて現地の方に言われたりして、想像をはるかに越えていた。想像もつかないようなことが、現実に起きた今、どう考えどう活かすかが残された私たちの考えるべき所だと思う。このツアーに参加したことで満足するのではなく、これからを一人一人が改めてよく考えていく必要がある。ここで出会った人との繋がりも一つの縁。その出会いを大切に今自分の出来ることを自分なりに考え行動していきたい。

たんぽぽ学部

4日間、被災地や復興に関わる人、地元の人たちと関わらせていただく中で、このツアーに協力してくださっている方の多さ、気持ちの温かさをとても強く感じました。この恩を、どう返して行くかを考えたとき、災害への備えをもっと実際的に考え直すこと、教員として、親としてできることは何か、また自分の周りにいる人々への感謝を忘れずに暮らすことなど、自分のすべきことが見えてきたように思います。ありがとうございました。

社福 4年

災害に遭わないことはできなくても、災害から助かることはできる。ツアーを通して震災前、途中、後と様々な視点から学べることが多かったので今回得たものを活かしたいと思う。
環境がとても良い所だったのでまた訪れたい。

今回のボランティアツアーで学んだのは、被災地のニュースとかで知りえなかった、現在のポジティブな面、ネガティブな面です。いろいろな語り部さんが最終的には前向きな話をしていて、悲しいだけの場所じゃなかった、というのを知れて良かったです。今回のツアーには感謝しています

文学部 4年

初めて、被災地を視察しました。正直、実際に来て、見て、肌で感じないとわからないことだらけでした。被災地と言うと、暗いイメージになってしまう人、とても多いと思います。でも、8年経った今、明るい未来があるとすごく感じたんです。それは、この町に住む方々の愛からだと思います。そこに、大川小学校の校歌「未来を拓く」ことの本質を感じたツアーでした。

今回のツアーでは、自分の生活に適応できること、どのように応用していくかを考えました。震災時の状況を聞くだけでなく、今現在、被災地に住んでいる若い人の話も聞けてすごく新鮮だったと思います。知識を蓄え、その場所から何かを感じ、それらを含めて自分で考えることが今できる私にとってのボランティア活動だと思いました。

心理学部 4年